

今、この瞬間に感じる幸せ

書道家

武田
双雲さんTAKEDA
SOUUN

「たけだ・そううん」1975年、熊本県出身。東京理科大学理工学部卒業後、NTT入社。約3年後に書道家として独立。NHK大河ドラマ「天地人」や世界遺産「平泉」など、数々の題字を手掛ける。2013年、文化庁から文化交流使に任命され、ベトナムとインドネシアで書道ワークショップを開催、2017年にはワルシャワ大学で講演を行った。2019年元号改元に際し、「令和」の記念切手に書を提供。ベストセラーとなった「ポジティブの教科書（主婦の友社）」をはじめ著書も多数。近年、現代アーティストとしての創作活動を開始し、アメリカやヨーロッパなどで個展も開催している。



現代日本を代表する書道家であり、アーティストとして世界にも活躍の場を広げてきた武田双雲さん。映画やドラマの題字から日本酒やゲーム、世界遺産のロゴまで手がけ、その作品の多くを私たちも身近なところで目にしている。185cmの体から生み出される書は躍動感にあふれ、見る者の心を魅了する。気さくな人柄で笑顔が絶えない双雲さんに、書道家になるまでのこと、ご家族のことについて、話をうかがった。

——書道家としてご活躍の双雲さんですが、以前は会社員として働かれていたそうですね。

僕は小さい頃からケガばかりするような子どもだったんですが、基本的にまじめで悪いことはしないし、親に反抗したこともありません。言い方を変えると何も考えていない子どもでした。

高校も大学も親や友達が勧めたところに進学しましたし、就職の時も皆が就職活動をしていることに気づかなかった。終わつた頃に「就職活動って何？」と言ったら、皆に驚かれて、研究室の先生の推薦で就職先が決まりました。

——それほど周囲の状況に気づかないとは、珍しいですね。

僕はADHD（注意欠如・多動症）の特性があるようで、周りのことに疎かかったです。20代までは宇宙のことばかり考えていて、30歳くらいから人間についてちょっとずつ学び始めました。人間ってそういう生き物だったのかって。

——そんな双雲さんが、どうして書道家を目指されたのでしょうか。

とにかく何でも工夫するのが好きなんですよね。会社で働いていた時も、電話を普通に取るだけじゃつまらないから、受話器を反対方向から取ってみるとか、いつもと違う声で話してみるとか、いろいろ試してみたくなるんです。伝言用のメモも普通だと面白くないから墨で書いていたところ、それを見た先輩たちから「武田くん書道やるの?」「珍しいんじゃない?」みたいな話が広がって、「のぼり旗に墨で文字を書いてよ」「お客様の名前を書いて」とどんどん頼まれるようになっていったんです。

——結構ニーズがあつたんですね。

「もつとたくさんの人を感動させたい。急がなければ」と思つて、その場で退職を決めました。

ある時、1人の女性社員から自分の名前を書いてほしいと頼まれてました。墨で書いて渡したら泣いて喜んでくれたんです。

——ただ名前を書いただけで?

そう。それで涙の理由を尋ねたら、自分の名前が嫌いだったと言うんですよ。名前をつけてくれた親との関係もうまくいっていないと。でも、僕が書いた字を見て「自分の名前が好きになれた。これを機に親と仲良くなれるかもしれない」と聞いて、僕もすごく感動しちゃって、その場で退職を決めました。「もつとたくさんの人を感動させたい。急がなければ」と思つて（笑）。

——思い立ったが吉日ですね。それで書道家だったお母さまに学び直されたわけですか。



情報化社会になったら、それまで
 幸せだと信じられていたことが、
 実は幻想だったと皆が気づき始めた。

そうですね。書道は3歳からやっていますが、改めて母親の書を学ぼうと思っ
 たら、しばらく実家に戻っていました。

——そこからどうされたのですか。

大学では情報科学を学んでいたの
 で、IT革命の流れが来ることはわかって
 いました。だったらインターネットで名刺を

販売しようと、すぐにホームページを作り
 始めて、名刺をデザインして掲載しました。
 普通は計画が先なんだろうが、僕は計画
 を立てる前に行動してしまっんです。行動
 して、ケガをしてから、「なぜだろう？」
 と考えてしまう。

——どんなケガをされたのですか。

ホームページを誰も見てくれなかった
 (笑)。そもそもアクセスがなかった。

——その後、書道教室を開いて評判になり、
 活躍の場を広げて書道家としての道を確立
 してこられたわけですよね。それにしても、
 計画もなく行動したら「失敗するかも」と
 不安にならなかったのですか。

「失敗するかも」と一瞬でも頭をよぎつ
 たら絶対にやらないです。もともと臆病だ
 から。僕の中には、「AをすればBが起
 くる」といった時間軸がないので、失敗も成功
 もなければ、期待もないんです。

——世の中には自分がやりたいと思っ
 て始めたものの、いざやってみるとうまくい
 かない人も少なくありませんが…。

普通は目標を立てて、そこから逆算して
 何をするか決めますよね。それはそれで素
 晴らしいことですが、これほど予測がつか
 ない世の中だと、それが通用しなくなっ
 てるんじゃないかと思えます。

例えば、昔は良い大学に入って、良い会
 社に就職すれば、良い人生を送ることがで
 きると信じられていました。でも、情報化
 社会になったら、それまで幸せだと信じら
 れていたことが、実は幻想だったと皆が気
 づき始めた。「あれ？世の中って、何も
 確定していなかったんだ。人間って明日の
 こともよくわかっていなかったんだ」って。
 今回の新型コロナウイルスの世界的感染拡
 大で、より一層強くそう感じられたんじや
 ないでしょうか。



——確かに、よもやこんなことが起ころうとは想像だにしていませんでしたね。

僕はよく毎日楽しそうだと言われるのですが、今この瞬間、瞬間を味わって生きているだけなんです。ただ目の前が楽しい。菌磨きの時は菌ブラシに感動するとか、ボタンがはずれたらボタンに集中するとか、その瞬間にしか生きられないし、このボタンを留めたら次は何をしようとは考えていないんです。誰が何を言おうと、僕は一瞬一瞬を味わって生きているだけだから、毎日の「幸せ」が確定できている。それに対して、多くの人はお金持ちになれたらとか、出世できたらとか、幸せになるための条件を持っていますよね。

——そうですね。

でも、収入が2倍になれば幸福度が2倍になるわけじゃない。「今」という瞬間をどう生かすかは自分次第、感謝するのも不満に思うのも自分次第です。今は幸せじゃないけれど、きつといつか幸せがやってくるという発想ではなく、今の瞬間を幸福な状態でいられば森羅万象どんなことが起きてても幸せを確定することができます。

——なるほど。それは明日、何があっても大丈夫な生き方かもしれませんね。

それに、自分が幸せだと思っていると、幸せな人やものが寄ってきます。逆に怒りや不安が強ければ、それらを引き寄せてしまう。だから、僕は「いかに自分の心身を整えるか」にこだわっています。

——自分の心身が整っているかどうかは、書にも表れるのですか。

表れますね。スポーツ選手は自分の体調のちよつとした変化にも敏感ですし、メンタルとフィジカルの調整をしているじゃないですか。書道も同じなんです。書を書いていると「今、心身が乱れているな」とか「ストレスを感じているな」といった少しの変化に気づきます。

病気も軽いうちは治りやすいですよ。僕は臆病なので、何事も軽いうち、小さいうちに察知して解決するようにしています。人間関係についてもそうです。

例えば、僕は和菓子が苦手なんですけど、最初に伝えておけば「そうなんですか」で済む話でも、時間が経ってから伝えたら「早く言ってくれれば」となりますよね。

——確かに、時間が経つほど言にくくなりますね。書道が心身のバロメーターになっていることですが、書を書かれている時はどのような心境なのでしょうか。

無に近い状態です。とは言っても、依頼を受けて書く時は、自分が書きたい書と相手が求めている書の最大公約数を探します。自分がワクワクして、相手もワクワクするような擦れ^{あや}のバランスやスピード感を調整したり。書って思いやりがないと書けないんです。相手に合った書でないといけないので。食品関連のロゴを書くのであれば、喉^{のど}に入れて痛そうだといけないから、丸っぽい字のほうがいいとか。

——そんなことを考えられているんですね。もちろん！ いつもクライアントとその先につながる人々がどれだけ喜ぶかと想像しながら書いています。

——「たくさんの人を感動させたい」という思いは、書道家になられた当初から全くブレていないのですか。書はプライベートで書かれることもあるのですか。

書くこと自体が好きなので、紙とペンがあればずっと書いています。きれいな字を研究したり、どこまで字を崩せるか試したり、紙の感触を味わったり。小さい頃からやっているので飽きませんね。妻と話している時にも書いてるので、怒られますけど。

——双雲さんにはお子さんが3人いらっしやいますか、家事と子育てはご夫婦で分担されているのですか。

僕は一瞬一瞬を味わって

生きているだけだから、

毎日の「幸せ」が確定できている。

相手を思いやったり、一緒にいる時間を 楽しむうちに、相手に対する リスペクトが変わっていった。

たまには手伝いますが、基本的に9割は妻です。そういう意味では昔風の役割分担をしています。比較的家にいる時間が長い分、子供を風呂に入れたり他のお父さんより子育てには関わっていると認めますけど、仕事もありますからね。不定期でしかできないし、あくまでもメインは妻です。

——奥様から不満や愚痴は出てきませんか。

子どもが1人目、2人目の時は、妻も愚痴を言っていました。僕としては家事も子育ても手伝っているつもりだったけれど、「え？ 手伝うって何？」みたいな夫婦喧嘩はありましたよ。「なぜ怒っているの？」と質問したら、もっと怒られるみたいな(笑)。僕は理系だから理屈で答えるんだけど、妻はそんなものを求めていなかった。

——火に油を注いだわけですね(笑)。

結婚して17年を過ぎた今、夫婦関係はどんどんよくなっています。17年かけて、お互いを受け入れる作業を続けてきたんだと思います。お互いに良い意味であきらめてきたし、相手を思いやったり、一緒にいる時間を楽しむうちに、相手に対するリスペクトが変わっていった。

これまで積み重ねてきた時間は、夫婦の受入れと改善の歴史だったと思います。別に仲が悪かったわけではないけれど、以前に比べて妻に共感するようになりましたし、「料理の天才だね」とほめたり、感謝の言葉を伝えるようにしています。

——以前は言われていなかったのですか。

言っていましたけれど、言う回数が増えましたし、表現力も上がっているはずですよ。何事も数をこなすと上手くなっていくじゃないですか。それと同じです。

——もともと人をほめたり、人に感謝することは得意なのですか。

両親から「すごい」とか「天才」とか絶賛されて育ってきたんです。人と比べられたことがないので劣等感が生まれなかったし、逆に優越感もありませんでした。そのせいか、僕は誰でもほめてしまう。しかも実績をほめるのではなく、人格をほめる。だから、皆が恐れている人も仏の顔にしてしまってみたいです(笑)。

——それは下心があつてとかではなく？

心からほめています。書道教室の老若男女300人の生徒さんに対しても全力でほめ



ているようで、生徒さんたちから「自己肯定感が上がる」と言われました。僕にとつてはそれが当たり前なんですけれどもね。基本的に人を嫌いなれないから、人間関係はほぼ100%うまくいきます。

——なかなか真似できないことですね。特にネガティブな思考を持っていると難しい。

そういう人は、まず自身を肯定することから始めてみてはどうですか。「よくここまで生きてきたな」ってあらゆる面から肯定して、尊敬する。そうすれば、周囲に対しても、感謝の気持ちで接することができるのではないのでしょうか。



そもそも未来のことなんて何もわからないのに、皆、希望を持ちすぎているような気がします。未来に期待をして、失望している。幸せになる条件を待っていたら、青い鳥なんて一生来ないし、来ても手に入れた瞬間、手放すことになりました。手に入れた途端、人は飽きていくものだから。僕の場合、今が一番好きなので、皆さんにとつての今と。

未来が入れ替わっているのかもしれない。
——お子さんに対しても同じなんですか。
今面白くないことこそ最大のリスクだと思っ
ているので、将来のために今面白くない
ことをしなくていいと言っています。
——面白いと思うことをやらせると。
やらせるのではなくて、ただ面白いと思
って生きているだけです。子どもの頃つて、

幸せになる条件を待っていたら、
青い鳥なんて一生来ないし、来ても
手に入れた瞬間、手放すことになる。

石を蹴っているだけで楽しかったじゃないですか。それが正解なんです。大人は何か楽しませてくれよと、誰かに期待するから楽しめない。僕は子どもたちといると、とにかく楽しい。楽しいことが次々に浮かんで、ずっと笑っています。親友と一緒にいる感覚です。

——奥様から「勉強させて」と言われませんか？
「勉強しなさい」と言われて勉強したくない子どもはいません。親が「この子はダメな子だから勉強させなければ」と不安で子どもと接していると勉強しなくなります。人はイメージした方向に向かうものだから。

妻は、「自分の人生なんだから、自分でやると決めたら責任もってやりなさい」という方針です。僕とは全く違う考えでしたが、話し合いながら歩み寄っていった感じで、今はちょうどバランスがとれています。

現在中学生の長男は小学生の頃から家族旅行の航空券やホテルの手配もすべてしてくれるような、すごくしっかりした子どもです。僕にとつてアドバイザーやカウンセラーのような存在。親バカになりますが、どの子もすごい人材で尊敬していますし、僕にとつて子育てはワクワクと感謝であふれています。

——子育てもそうですが、不安にとらわれ過ぎずポジティブな気持ちでいることが大切なのかもしれませんね。お話しいただき、ありがとうございます。

(インタビュー)ライター 更田沙良